

フロンティアスクール中間報告書

(千葉県)

I. 学校の概要(15年4月現在)

千葉市立弁天小学校									
	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特殊	計	教員数
学級数	1	1	1	1	1	1	0	6	12
児童数	25	30	32	28	30	32	0	177	

II. 実践研究の概要

1. 主題

生活科及び総合的学習に生きる基礎・基本の学力の向上

— 自分の思いを確かに書き伝える力が身につく指導体制の工夫 —

2. 内容と方法

(1) 実施学年・教科

学年	教科	選 択 理 由
1年	国語 一行文	書く意欲や技能面で個人差が大きく、言語事項の基礎・基本をどの児童にも定着を図りたいから。
3年	国語 手紙文	手紙文や案内文相手意識・目的を持って書く意欲や・技能面で個人差が大きい
4年	国語 詩	詩や文で自由に自分の思いを表現する意欲・技能面で個人差が大きい
5年	国語 詩	詩の形式や表現技法を駆使して自分の感じたことや思いを表現する際に意欲・技能面で個人差が大きい
6年	国語 短歌俳句	短歌や俳句等自分の思いや考えを分かりやすく表現する際に意欲や技能面で個人差が大きい

テーマ設定の趣旨

小学校期は、「話す・聞く・読む・書く学習」の入門期である。この3つの活動は互いに連動する言語活動であり国語の学力の中核である。13年度に本校は、生活科や総合的学習の記録と評価の方法として、ポートフォリオを活用した。ところが、予想以上に、児童の「書く力」に個人差が大きいことが明らかになった。よく聞き、よく話し、よく読むまでは比較的順調に学習が進むが「書く活動」になると、活動そのものが本来の活動を阻む

要素になってしまう例も多い。確かに、書く活動は表現の目的・意図、言語の意味理解・文章構成等様々な言語能力が伴わなければならない。指導面でも多くの問題が予想され、書くことの指導は改善の余地が多い分野といえよう。しかし、問題に埋没することなく、「書く力を培うことで読む・話す力も相互的にのびるのではないか」と考え本研究に取り組むことにした。児童個々の進度の個人差や技能の差に応じた、きめ細かな指導体制を工夫すれば児童の国語の総合的な学力を高めることができるのではないかと考える。そこに、少人数指導の意義や新しい指導方法を究明する研究的な意味もあると考える。

本研究では、児童が国語の「書く活動を中心とした学習」で「楽しく基礎・基本を学び」それを、発達に応じて生活科や総合的学習の「課題把握や解決」に役立てるようにさせたいと考える。

(2) 年次計画

平成
14
年
度

○ 主 題

自分の思いを確かに書き伝える力が身につく指導体制の工夫1

○ 仮説(課題)

研究課題1 指導体制の工夫

国語科「書くこと」の学習において少人数指導の体制を工夫し、児童の表現力を高める。

研究課題2 関連的扱い

国語科「書くこと」の学習と他の学習(生活科、総合的学習)や日常的な書く活動(日記や手紙等)を関連付ける指導を行い児童の書き伝える意欲を高める。

研究課題3 評価方法の改善

児童の書く意欲や書く技能等の基礎・基本の能力の実体を捉え指導に生かし指導と評価の一体化を目指す。

○研究内容・方法

① 「書く心を育てる工夫」と言語環境

児童の書きたい気持ちを育てる。このことは、いくつかの条件が整う必要がある。

- ・ 日本語の素晴らしさを知り、楽しく使える環境づくり(会話、文字指導)
- ・ 要約、コメント、伝達、表現の工夫等を評価できる環境づくり(評価、展示、作品)
- ・ 日常の言葉を大切に扱う工夫(教師・保護者・地域の価値観、話し言葉と書き言葉の違い)
- ・ 書く意欲を高める教科及び生活、総合の学習に関連性を持たせる。(必要感、体験、取材等)

② 個に応じたきめ細かな指導体制

- ・ 児童一人一人に応じたきめ細かな指導を行うために「あづま台デスク」を中心とした学習支援体制の整備を拡大し、教科指導にも少

人数指導を導入する。

- ・ 付箋紙とポートフォリオを活用し、児童の「書き伝える力」が身につく学習指導の実践と評価
- ・ 国語の指導を中心に研究授業を行う。
- ③ 保護者と担任の協力による評価体制
 - ・ 通知表の工夫（2種類の通知表による児童の学力の実態と向上の対策を連絡しあう。） A 年間2回の総合的な通知表 B 年間4回の担任と保護者、児童で作る通知表
 - ・ アンケートの実施、学力テストの実施
- ④ 研究推進ネットワークの整備（地域・保護者及び地区の学校の協力、研究協力者を募る等）
 - ・ 「新しい学力」の概念を中心とした研究の共通理解を図るための資料収集と研修
 - ・ 中央図書館の活用による心の教育の推進
 - ・ ホームページの開設と、共同研究の推進者を募る。

平成
15
年度

○主題

確かに書き伝える力が身につく指導体制の工夫2（書き伝える心を育てる）

○研究仮説(課題)

研究課題1 国語科「書くこと」の学習において少人数指導の体制を工夫し、児童の表現力を高める。

※昨年度は少人数は最善の方法として、より多くの指導者とより多くのグループ構成で学習を進めたが、学校全体の経営から見ると指導体制の運用に無理が生じた。本年度は児童の実態に合わせ、児童同士が良い影響を及ぼし合う体制作りも視野に入れTT等の指導とも柔軟に組み合わせるようにしたい。

研究課題2

聴写による主として表記に関する基礎・基本のトレーニング

国語科の日常的な書く活動（聴写、取材メモ等）を取り入れ基礎・基本的言語技能の習熟を図る指導を行い、児童の書き伝える技能や興味・関心・意欲を高める。

研究課題3 評価と指導の一体化

児童の書く意欲や書く技能等の基礎・基本の能力の実体をテスト等により捉え、個に応じた指導目標の焦点化を図る。

○研究内容・方法

①教師の指導力の向上を図る

少人数指導を中心として国語科校内研究授業（児童の表現力の向上）実施と分析，学力テストによる児童の実態に基づく単元全体計画と授業実践。学力の概念の共通理解，指導方法の改善と評価の方法の工夫改善，教科の基礎・基本の指導事項の理解，単元全体を見通した指導理念の明確化，児童の実態に応じた柔軟な指導体制の工夫，協力指導の充実等

②児童の学習意欲を高め集中力の持続を図る工夫，達成感や自信を伴う学習の楽しさ喜びを生み出し指導方法の工夫

③聴写の時間を日課表に位置づけ，指導の事前と事後の聴写力の比較を行い，発達や個人的な伸びを分析する。

④保護者との連携を図るため通知表や学力に関する様々な情報提供を行う（学力の葉，学校連絡，二期制等）

⑤学校間の連携（地域の教育力の活用）を図るため地域学校を校内研究会に招待する。

⑥インターネットのホームページ開設と電子研究紀要を作成し，これからの研究情報の共有の在り方を明らかにする。

⑦学力テストの実施

○主題

確かに書き伝える力が身につく指導体制の工夫3（書き残し振り返る心を育てる）

○仮説（課題）

研究課題1

書き伝える相手を理解し，それに応じて自分の表現を変えられるようにする指導過程及び指導体制の工夫

研究課題2

聴写の良さを生かし要約する力（要約メモをする）を高める指導方法（聴写のカリキュラムと実践事例の分析）について明らかにする。

研究課題3

電子研究紀要の充実と成果の共有を全国に向け呼びかける。

○研究内容・方法

①発信側・表現する自分のことに関心が偏ることを改め，相手を理解し両方の関連において表現のスタイルや，内容を変えられる力を付けるための指導体制の工夫を行う。

②書くことによる「気づき」を整理するためのファイルを活用し，自分を振り返る活動を取り入れる。

③児童が自信をもち新たな課題に取り組む支援体制について，事例を

通して考察する。

④児童の主体的な学びを培う学力と評価について、通知表を通して保護者、教師の連携を図りながら、児童の学力を向上させる方策についてまとめる。

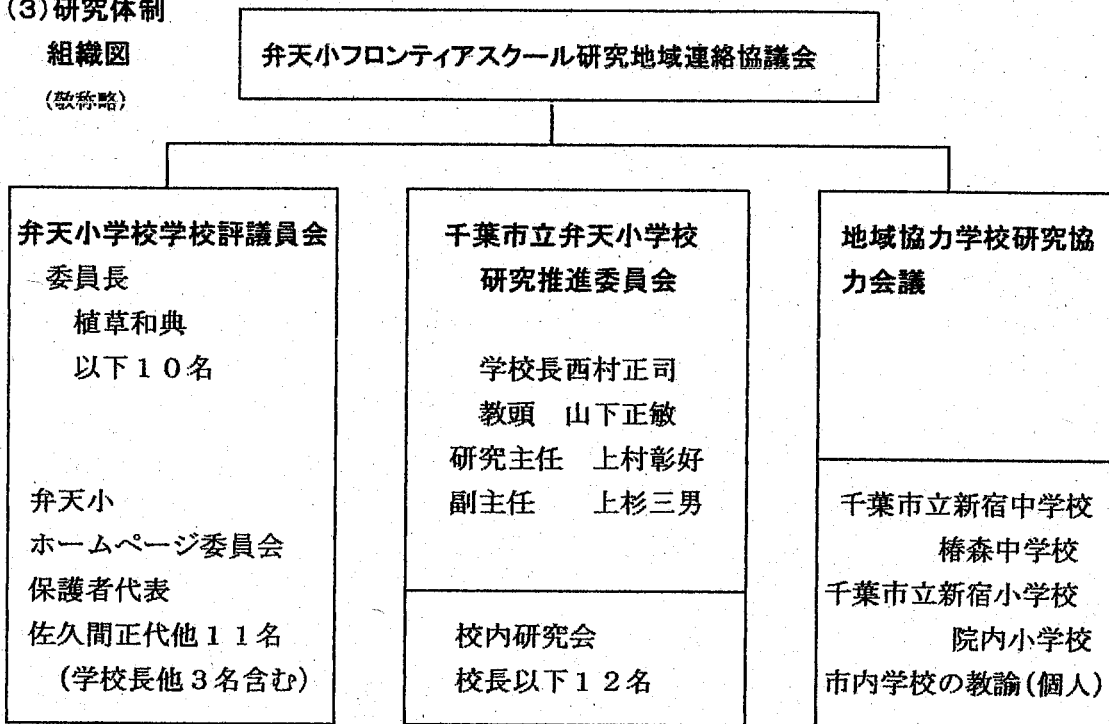
⑤インターネット・ホームページによる報告会を開く。電子研究紀要を5回更新して16年度紀要を作成すると

⑥学力テストの実施と分析

(3) 研究体制

組織図

(敬称略)



Ⅲ 平成15年度の成果および今後の課題

1. 研究の成果

(1) 研究課題1について

国語科「書くこと」の学習において少人数指導の体制を工夫し、児童の表現力を高める。

少人数指導体制を組むかどうかを判断するには、指導のねらいと児童の実態を分析しなければならない。少ない事例であるが少人数の効果とT.Tにはそれぞれの特徴が出ている。

① 児童の表現力を高める少人数指導とT.T

学年	意図	少人数	意図	T.T.
1	語彙や記述力等の	自力で解決出来ない子に効果あり	初めての体験、学	導入、全体発表で、遅れがちな子に効果的

	個人差に 対応		習のイメ ージ理解	
3	習熟度別 の個人差 に対応	能力別グループ編成を してもその機能が発揮 されない場合がある	全体の導 入とまと め	個別作業時に必要が生じた 子の相談にのるには効果的 様々な意見交換, 全体指導
4	表現の能 力差に対応	同上, 自分らしい表 現を工夫する際の指導 に適している	活動の 広がり に対応	共通の作業でも個人差が 出る場合の個々への指導 に効果的
5	表現主題 別グルー プに対応	グループ内の児童相互 の共同作業が停滞した 折の指導に効果的	まとめや 鑑賞等	清書等まとめの段階での 個別指導に適している。
6	表現主題 や表現技能 別グルー プ別に対応	表現技能面で問題を抱 える子への対話ができ て効果的	児童主体 で全体が 同じ活動 を行う場 合の個人 差に対応	個別学習で, 自主的に学 習する子には見守る程度 表現が苦手な子へ積極的 に対応できる

(考 察)

事例が少ない中で、確定的なことは言えないが、少人数指導も一つの学習形態である。教師も児童もその形態（方法）に習熟するところまで、至らない点も多々ある。学習効果を高めるために次のような留意点が明らかになった。

② 指導の実際

児童の実態は知識技能、表現意欲、関心の対象等を理解し、特に表現力の低い子は他の児童と歩調を合わせられず学習の成果が上がりにくい。心にもなくふざけて学習を乱す行動に走ることもある。

また、教師は平均点で児童の実態を見る傾向がある。児童個々の学力の実態に注目して、表現力の乏しい児童にはその児童のプライドを傷つけることのないように、表現しやすい、達成感のもてる内容に導く工夫が必要である。

1年生では、一行作文を書かせる時に、きれいなカラーでファンタジックな「お気に入りの絵」を選ばせて、その絵から想像したお話やテーマを端的でその子なりの言葉で表現し伝える活動を行った。この活動を通して表現する楽しさを児童は知ったと思われる。

3年生は総合的学習でお世話になった人やこれから交流する相手に、心のこもった手紙文を積極的に書いた。感謝の気持ちを伝える、心のこもった手紙をどのように書くかを考えながら書いた。グループを表記上の問題別・能力別に分けて指導したが、前書きのところで思いもかけぬつまづきがみられ、入り口でつまづき中に入れない状

態となった。一斉の TT 指導の方が適していた結果となった。お互いに実際に会うという活動・交流会・インタビューなどを取り入れたため児童の書く意欲は相当に高まったと言える。また、自分のことに夢中になり相手の気持ちを考えるゆとりや、理解の方法が不十分になって、一方的な手紙文になってしまった。

4年生では、自分で選んだ詩の題にふさわしい言葉が浮かばない児童がいたが、それらの児童を集めて「かりん」という共通の題で詩を書かせた。それぞれが「かりんの実」を用意してふれさせたり臭いをかいだりさせながら自由に素直な思いを語らせると、児童の態度は一変した。

5年生では、グループ毎の協力で自分が表現したい言葉や詩の形式を創っていった。お互いが肯定的な評価やアドバイスをしていくうちに、表現意欲が高まってきた。

このように、学習の過程で児童が自分の思いを十分に表現できるようにすることが大切に思う。そういう意味では、導入と終末はTTで途中の主題追求は少人数やグループで行うのが適切であると考えられる。

6年生は短歌と俳句の学習を通して「効果的な表現」について意識を高める活動を取り入れた。鎌倉の校外学習での体験。歌会での相互評価を行う。少人数では、見学場所別グループによる少人数指導などを取り入れた。表現と評価を組み合わせた学習は効果的であった。

(2) 研究課題2 聴写による表記の基礎・基本のトレーニング

国語科の日常的な書く活動（聴写、取材メモ等）を取り入れ基礎・基本的言語技能の習熟を図る指導を行い児童の書き伝える技能や興味・関心・意欲を高める。

週の日課表・朝自習の時間に聴写を位置づけた。5月に児童の聴写に関する実態調査を行い、12月に事後調査を行った。聴写の時間はおよそ10分として、次のように行った。結果聴写の力は伸びていることが分かる。しかし、個人的には伸びないままに逆に低下している児童もいる。

聴写は集中力はつくと思われる。もしこの集中力が途切れたら不本意な成績になることは目に見えている。児童個々に追跡調査を行う必要がある。

また、次の表からも分かるように聴写の伸びは低学年ほど高く、高学年は伸びていないことが明らかになった。このテストは、短い文を教師がテープに録音し、次の観点で評価したものである。（文字を正確に書いているか、漢字も書けているか、句読点・行かえを正確にしているか）

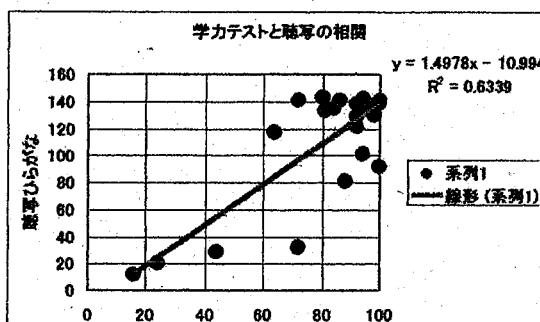
低学年の指導の充実が効果的である。指導すればその効果を期待できる。高学年になると聞く、文節のイメージ、文字の変換の能力は固定化していることがわかる。

このことから、要約力やメモ力を高めるのはかなりの困難が予想される。

① 聴写の結果（事前2003、5月）（事後2003、12月）

事前事後は100を満点とする

	1年	3年	4年	5年	6年
事前	31.4	53.3	61.5	65.4	65.2
事後	56.4	59.9	64.0	66.4	66.4
伸び率%	36.5	14.0	6.5	2.9	3.5



(1年生)



(5年生)

低学年ほど聴写と学力テストの相関は高い。言語事項の指導は低学年のうちに丁寧に指導すれば学力にも良い影響を及ぼすものと考えられる。しかし、学力の内容のうち表記事項のしめる割合が高いのではないだろうか。高学年はその点異なっていると考えられる。

研究課題3 評価と指導の一体化

児童の書く意欲や書く技能等の基礎・基本の能力の実体をテスト等により捉え、個に応じた指導目標の焦点化を図る。

一つの例であるが、教師は単元の指導計画を立てる。まず始めに目標を分析する。次に教材を分析する。時数を計算し一時間毎の小目標と教材を中心とした主な学習活動及び教師の発問・評価計画をたてる。教師一人の場合には比較的自由に出来るが、少人数や TT 等では事前の打ち合わせをきちんと行う時間が必要である。問題は、上記のような順序で良いのかというところである。

その一つは、評価のことである。今ほどの学校も業者が作成したテストを使用している。はじめに評価ありきである。これでは、学力を向上させる意図的な計画、教師の主体的な指導は望めない。始めに児童の実態を問題にしないと、ついて行ける児童はのびるがそうでない児童はかなり理解の上での混乱や、学習の停滞をおこしやすい。

そこで、本校はこの順序の先頭に児童の実態分析から入ることにした。指導案の形式を変えることで、少人数や TT 等の指導形態を選択する根拠と児童の実態との整合性が明確になるようにした。主な内容は、1、全体研究主題 2、児童の実態(学力テスト)と考察(平均がけではない児童個々の実態分析) 3、単元名 4、単元設定の理由(1)児童の実態、実践上の課題、教師の願い・指導方針 (2)本年度の単元構成、5、本年度の研究課題について(1)指導体制の工夫(2)聴写(基礎・基本のトレーニング) 6、単元指導計画(1)単元のテーマ (2)単元指導計画・評価計画 ア、目標 イ、指導計画 ウ、日常的な言語活動と評価方法 7、本地の指導計画(1)目標 (2)展開とした。

学力テストは2月13日に実施する予定。昨年度との比較を分析したい。

本校の学力の傾向として、書く力について県のレベルと比較すると、読む力に比べて落ちていることが分かる。15年度の結果と合わせて比較し本校の児童の学力の問題を分析

し、指導の改善を図りたい。

関心・意欲・態度

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
本校	82	72	70	73	59	58
県	75	72	66	69	62	61

言語・言語事項

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
本校	92	92	79	77	88	76
県	85	90	73	74	81	77

書くこと・書く

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
本校	64	74	79	79	64	80
県	62	73	70	74	65	81

読むこと・読む

	1年	2年	3年	4年	5年	6年
本校	73	91	71	77	72	78
県	68	86	67	69	68	75

(平成14年度)

相対的に県のレベルには到達しているが、高学年の意欲、書くことの達成率は他と比べて低い傾向にある。高学年の児童の実態はさらに分析していく必要がある。

2. 今後の課題 ……書く力の育成から書き伝える力の育成へ……

(1) 2年間の研究成果と課題

研究も2年を終えるにあたり、児童の書く力を育成するには、本校として次のような条件が必要であると考えます。

a 教師の指導力の向上を図る

少人数指導を中心として国語科校内研究授業（児童の表現力の向上）実施と分析、学力テストによる児童の実態に基づく単元全体計画と授業実践。学力の概念の共通理解、指導方法の改善と評価の方法の工夫改善、教科の基礎・基本の指導事項の理解、単元全体を見通した指導理念の明確化、児童の実態に応じた柔軟な指導体制の工夫、協力指導の充実等

b 児童の学習意欲を高める

学習への集中力の持続を図る工夫、達成感や自信を伴う学習の楽しさ喜びを生み出し指導方法の工夫

c 言語事項や表記法の基礎・基本の習熟を図るトレーニング

聴写の時間を日課表に位置づけ、指導の事前と事後の聴写力の比較を行い、発達や個人的な伸びを分析する。

d 保護者との連携を図る

- 通知表や学力に関する様々な情報提供を行う（学力の采、学校連絡、二期制等）
- e 学校間の連携（地域の教育力の活用）を図り授業研究の充実
地域学校を校内研究会に招待する。委員会・大学等の研究機関との連携をはかり、自校の取り組みの問題点の改善を図る。
- f インターネットのホームページ開設と電子研究紀要・冊子紀要を作成
更新により、タイムリーな研究情報の交換をすることにより、独りよがりになりがちな研究姿勢を修正する。これからの研究情報の共有の在り方を明らかにする。冊子の研究紀要とは異なる変化する紀要を作成する。
- g 学力テストの実施
児童の学力の偏り等の問題を探り移動方法の改善を図る。少人数指導の効果的な導入を検討する。

(2) 残された課題 …… 自分を知り相手を知り深まりのある表現ができるようにするにはどうしたらよいか……

課題 1

書き伝える相手を理解し、それに応じて自分の表現を変えられるようにする指導過程及び指導体制の工夫

書き伝える力とは、表現する主体としての自分と伝える相手との関係で発揮される国語の表記力である。これまでの、研究では少人数の指導を効果的に取り入れることに力を注いできたが、特にどのようなグループ分けをするかが課題となった。しかし、国語の学力は、表記のミスは直ちに発見指導できるが、表現や思考の内容を把握し指導するのは困難である。また、書く力をつけても内容を見ると自分よがりのものが多々見られる。一方的に自分の思いを書き伝えるだけで、相手への心や思いや期待などを読み取れないため内容が浅薄になっている。

書く側の力や思いを表現する力はこれまで同様におこなうとしても、表現内容に相手を思いやる、理解を深める（人間でない場合もある対象といった方がよいかも知れない）活動をどのように取り入れ、指導はどう工夫したらよいか、指導体制のありかたも、少人数は可能な限り絞って、問題を明確にし、問題をもつ子への指導・取り立て指導としてみたい。ほかに、一斉、TT 指導、グループ等を多用にたい。

課題 2

聴写の良さを生かし要約する力(要約メモをする)を高める指導方法(聴写のカリキュラムと実践事例の分析)について明らかにする。

聴写の本年度の実態は次のことが言える。低学年の指導ほど効果が上がり、高学年においては変化しにくいことが明らかになった。また、学力と聴写の相関も低学年ほど高い。本年度の実践を基盤に楽しく取り組ませたい。

低学年は視写や読む話す聞く活動も総て重要であるが、「良く聞き楽しく書く」を推進したい。

高学年は、要約力に入る前に表記の基礎・基本の評価基準を設け、あるレベル以上を要

約力の学習に進ませる方が良いと考える。他にも児童相互で読み合い、聴写をし合う活動など児童の表記への意欲の喚起を図る工夫をしたい。

課題 3

電子研究紀要の充実により多くの学校及び保護者と成果の共有を図る。

冊子による研究紀要は一年間は書き換えることが出来ない。一方いつでもどこでも読むことが出来る。紙面の都合で厳選された内容が掲載されている。

それに対し、電子研究紀要は何回も更新できる。不特定多数の人がホームページで見ることができる。しかし、いくつかの制限がある。コンピュータがなければ見ることができない。プリントアウトしなければじっくり見られない。ソフトウェアの中に存在する「バーチャルリアリティ」(映像の中の現実)としては存在する。一昔前なら、その市民権の確立までは言っていないように思える。しかし、これからは書き換えつつ真実を追究する、旬の情報を提供できる、新しい発想の紀要として認められる時代が来るかも知れない。

この件に関しては、千葉市ホームページ作成ガイドライン、個人情報の保護やウイルスの進入防止、サーバー管理者の監督指示を受けるなど多くの問題があることも事実である。

(3) 主な活動と方法

- ①発信側・表現する自分のことに関心が偏ることを改め、相手を理解し両方の関連において表現のスタイルや、内容を変えられる力を付けるための指導体制の工夫を行う
(校内研究会)
- ②書くことによる「気づき」を整理するためのファイルを活用し、自分を振り返る活動を取り入れる。
(本校独自の聴写ノートの制作活用)
- ③児童が自信をもち新たな課題に取り組む支援体制について、事例を通して考察する。
(少人数指導の導入の根拠の分析と共通理解)
- ④児童の主体的な学びを培う学力の増進と評価について、通知表を通して保護者、教師の連携を図りながら、児童の学力を向上させる方策についてまとめる。
(二期制と通知表ミニレターの特質を生かす発行計画の策定)
- ⑤計画的(更新毎)にインターネット・ホームページによる報告会を開く。電子研究紀要を5回更新して16年度紀要を作成する。
(ホームページ委員会の活動)
- ⑥学力テストの実施と分析
(指導案と学力分析の関連を図る)

IV 学力把握のための学校としての取り組み

- ①千葉県標準学力テスト(国語、算数)全学年対象 2月中旬

実施の目的 児童の学力の実態を知り、学力向上のための指導方法の改善に役立てる。また、保護者にも順位等の結果を除き連絡し、児童の学習上の問題と対策について共通理解を図る。

②聴写の検査（国語）全学年対象 5月と12月

実施の目的 聴写の力と学力の相関，児童個々の伸びを調べ指導効果の分析を行う。検査内容は，15年度に低中高学年用として作成した。

V, フロントアスクールとしての研究成果の普及

①研究会 学習指導研究会 3回

研究課題の解決のために授業を実施し検討する。

弁天小フロントアスクール地域連絡協議会

②フロントアスクール研究報告会 千葉県教育委員会 千葉市教育委員会

平成15年11月14日 参加者約150名，学校評議員地域の学校の職員にも参加要請

③ホームページに研究の概要掲載，文部科学省とリンクの許可を得る。更新5回

千葉市教育センターのサーバーにてホームページを開設。学校経営の紹介の中にフロントアスクールの研究内容を掲載する。千葉県や全校の閲覧者からメールが入るようになった。成果に期待する内容である。

ホームページ掲載の趣旨と方法

- ・学期毎の旬の情報を掲載し，学校を開き，学校経営の成果と問題について理解を求め，保護者，地域，広域の人々にも協力・示唆をて解決に当たる。
- ・保護者と教師による学校ホームページ委員会の立ち上げ，円滑な営を図る。（会合の回数，コンピュータの研修，環境の整備，掲示の利用，メール連絡網の作成）
- ・サーバー管理者との連絡，セキュリティの遵守

④フロントアスクール合同研修会で発表 平成16年2月4日

⑤平成15年度研究紀要の発行 平成16年2月

⑥電子研究紀要（ホームページ）にて公開 平成16年3月

【新規校・継続校】 15年度から新規校 14年度から継続校

【学校規模】 6学級以下

【指導体制】 少人数指導 TTによる指導

【研究教科】 国語

【指導方法工夫改善に関わる加配有無】 有